

ふるさと満州と敗戦

静岡県 筑木 静治

父善作の出身地は本籍地の三島市で、高等小学校を卒業すると身内の元で大工となり、二十三歳で上京した。昼間は工務店で働き、夜は東京工業専修学校で学び（入学時は蔵前工業専修学校と称した）、昭和六（一九三一）年に二十八歳で同校高等工業部建築科を卒業した。

昭和八年、三十歳の時、沼津市の出身で二十一歳の母でふと結婚した。今となつては、私には両親が渡満した時期と動機を知るすべはない。昭和十年に撫順で私生まれ、十二年には大連で妹昌代が生まれた。十三年から二年間は父の病氣療養のため沼津市で暮らしたが、十五年になると父の病氣も治り、復職して新京特別市永楽町に転居し、その年のうちに次男賛治が生まれた。翌十六

年に私が新京八島在満国民学校に入学し、その年の二学期ころに、父の転勤で奉天市大和区青葉町に再び転居した。私たち一家は、会社の名前をとった「高岡荘」という建てられたばかりの社宅の一階に入居した。社宅はコの字型をした一部地下一階、地上三階の鉄筋コンクリート造りの頑丈な建物で、当時としてはモダンな建物だった。私は奉天葵在満国民学校に転校した。その年の暮れに大東亜戦争が始まった。昭和十八年に三男明治が生まれ、私たち一家は両親と子供四人の家族構成となった。

父は、満州の高岡組という土木・建築の設計施工をする会社で、建築技師として働いていた。私には生活のレベルは分からないが、母から「ポーンナス期に父から『好きなように使え』と二万円を小遣いにもらい、どうやって使おうかと思った」と聞いたことがあるので、生活には不自由はなかったと思う。

子供としての私の生活は、あれは撫順か、大連

のできごとではなかったかと思われる曖昧模糊とした断片的情景も浮かぶが、物心がつき始めたのは沼津の三歳ころからで、常に富士山が見えていたことと、母方の祖父の葬式を覚えている。

新京（長春）では紀元二千六百年の祝典、次弟の誕生、母に連れられて児玉公園でロボに乗ったり、木陰でお弁当を食べたことなどを覚えていゝる。奉天（瀋陽）になると、かなりはつきりと記憶がある。電線が唸り、粉雪の舞う寒い寒い冬の夜。しかし二重窓の家の中はスチームが音をたて明るくて暖かった。冬の間は、もっぱらスケートをやり、砂山にソリ滑りにも行った。柳が一斉に緑になり、待ちに待った春の訪れ。遠足に行つた東陵や北陵。走っても走っても汽車は止まっているのではないかと錯覚するほど景色が動かさず、隣の駅になかなか着かない広い満州。西の空を真っ赤に染めて果てしない地平線の彼方にゆっくり沈んでゆく大きな大きな太陽。そこで日の暮れるまで、毎日毎日遊んだ懐かしい幼馴染みたち。

私の懐かしいふるさと、満州。両親と私たちの平凡な幸せはいつまでも続くはずだった。

昭和二十年五月、新設の第一二八師団歩兵第二八三連隊に臨時召集されて国境に征つた父は四十二歳であった。出征の日、玄関先で一言二言、母に何か言つて出て行く後ろ姿を見送つたのが、私たちの父の見納めとなった。

私が五年生の八月九日夜半、突然に空襲警報が発令され地下室に避難した。朝になって新京空襲はB29ではなく、ソ連空軍機であったことと、ソ連の参戦を知らされた。八月十五日の重大放送は、私には理解できなかったが、戦争が終わつたらしいので父もそのうち帰つて来るものと思つた。その後、ラジオは何も喋らなくなり、三階の廊下の窓から覗くと、西側五〇〇メートル地点にある連京線には、屋根の上まで人と荷物が鈴なりになつた列車が続々と南下していくのが見えるようになった。

そんなある夜、道を隔てた東隣の奉天第二中学

校に駐屯していた日本軍部隊に保護された。私たちは、毛布を用意して机も電灯もない真っ暗な教室の床に、今にもソ連軍が入って来るのではないかと、息を殺して一晚泊まった。子供心にも、これからどうなるのだろうかと将来が心配だった。

家に戻って撫順に復員する知人が立ち寄り、六畳間でくつろいでいたところ、突然玄関からガタガタッと音をたて、赤い顔の大きな二人のソ連兵が拳銃を突きつけながら駆け込んで来て「ダワイッ、ダワイッ」と大声で叫んだ。私の大和魂はどこかへ消し飛んだ。母の後に続いて隣の八畳間、廊下、台所と裸足のまま外へ飛び出した。母はなぜか玄関から家の中に駆け戻った。私は玄関の前を通り過ぎ階段を駆け上がって廊下を走り、向かいの二階の野沢さん方に飛び込んだ。そっと我が家を見おろすと、くだんのソ連兵が機嫌よさそうに出て来たところだった。恐る恐る家に戻ると、母は一番下の弟が行水をつかっていたので戻ったと言い、ソ連兵が「トケイ、トケイ」と叫

びながら、身振りで時計を出せと言っているらしいと思ひ、目覚時計を出したが、身振りで「腕時計だ」と言うので仕方なく腕時計を二つ渡してやると、「ハラショー」とニコニコして出て行ったそう。私は、母のことも弟のことも忘れて逃げたしまった自分が恥ずかしかった。そして、これが私と敗戦とのささやかな出会いでもあった。

私の家が最初に被害にあったので、自衛手段として、そこは土木・建設の技術集団のこと、社宅の表出入口をレンガとセメントで塞いでしまい、一階の外側に面した窓は破られないように頑丈に補強した。コの字型の建物の開口部を塞ぐように設置されていた二メートルぐらいの塀の上には、さらに二メートルほどの塀を継ぎ足し、鉄条網を張り巡らして社宅自体を要塞化した。社宅への出入口はその塀の小さな木戸からだけとして、交替で門番に立った。また、各戸とも玄関と台所のドアの外側ノブをはずして、外からの手がかりをなくし、玄関は鍵をかけっぱなしにして、出入りは

もっぱら台所とした。一階と二階は造りが全く同じだったので、二階の押し入れの床の半間四方を取り外し可能にし、一階とのコンクリートを根気良くタガネとハンマーを使って穴を開け、一階の押し入れの天井も取りはずし可能にした。一階床の間を上げられるようにし、コンクリートに穴を開け、ハシゴを据えつけて地下室に行けるようにした。これでソ連兵が来ても、入るまでの時間を稼げば、女の人は外へ出ずに二階から一階へ、そして地下室へとジャングリズムのような逃走網を使って、どこへでも逃げられるようになった。社宅は、一階と二階に各六世帯、三階に一世帯と独身者の部屋数室、重役宿泊室教室があったので、高岡組関係者や親類の人などが、頼ってきて大勢入居した。

そのころ、隣の野田さんが復員して来た。野田さんの家には子供がなく、奥さんと猟犬のベリが家族だった。隣同士なので社宅に入ったときから親しくしていて、私たち兄弟は全員、奥さんのお

世話になった。またベリとはもらわれてきた子犬のときからの親友だった。

そのころから、破れて、垢で黒光りする汚い軍服を着た乞食のようなソ連軍が、続々と進駐して来た。しかし日本軍と違って、なりは汚いが全員が鈍く光る自動小銃（マンドリン）を必ず持っていた。街の四方八方から銃声が聞こえるようになったのはそれからであった。おまけに隣の奉天第二中学校には、私たちを保護してくれた日本軍と入れ替わったソ連軍の兵舎となり、私たちは狼と隣組になることとなった。

彼らには軍紀や軍務などは全く無いらしく、昼間から酔っ払い、あっちでも、こっちでもマンドリンを「バリバリ、バリバリ」と乱射しながらほっつき歩いていた。奉天市内は銃声に包まれて、さながら市街戦の街と化した。建物に「ビシッ、ビシッ」と当たる弾の音や「キーン」と跳ねて飛んで行く弾の音、これが何十日間、四六時中続いた。そんな音に混じって「ボン、ボン」と

聞こえる小さな音は、拳銃の音である。こんなものは恐れるに足りない。そのうちに銃は向けられない限り、また音が聞こえている間は死なないんだと、子供心にも諦観をもった。

三階の窓からそっとのぞくと、ソ連兵を先頭に満人が大勢、手に手に棍棒を持ち、喚声を上げながら社宅の回りをとり巻いていた。二重、三重になった暴徒の輪が社宅の周りを回って突破口を探している。それは、かつて見た幌馬車隊の周りをインディアンが回りながらすきを狙って襲いかかる、西部劇の映画のようであった。暴動が始まり、奉天は無法地帯となった。幸い私たちの社宅は逸早くガードを固めていたので、暴徒からの被害は一度も受けなかった。暴徒には襲われなかったものの、ソ連兵からは数え切れないほどの掠奪にあった。ちよっとの油断から木戸から入られたり、四メートルの塀もなんのその、乗り越えては仲間を木戸から引き入れ、中庭でマンドリンを空に向けて「バリバリ」と威嚇射撃をし、「時計ダ

ワイ」「お金ダワイ」と掠奪された。

その中から一番記憶に残っている一被害例を記してみたい。

ある夜、寝込んだばかりのところを、母から起こされた。このころ、私たち一家は「女子供だけでは心細かろう」と言われて、隣の野田さん方の八畳間で寝起きをしていた。目が覚めると、社宅の外には大勢の軍靴の音がして、ソ連兵が大きな声で叫びながら出入口を「ガンガン」たたいている。母は「外に露助が大勢来ていて、いつもと様子が違うから、野田さんの小母ちゃんと一緒に逃げるからね」と言いながら野田さんの奥さんと床の間から地下室に消えていった。私たち兄弟も着替えて布団をたたみ、部屋の隅にかたまった。隣の六畳間では野田さんも着替えて座っていて、「大丈夫だから心配しなくてもいいよ!」と私たちを力づけてくれた。

この日のソ連兵は異常にしつこかったが、そのうちに静かになったので諦めたかなと少し安心し

た。しばらくすると床の間を「コッコツ」とノックする音がした。私は母たちが帰ってきたものと思ひ、床の間を上げた。地下室から上がって来たのは、敗戦後どこからきたのか親戚を頼って社宅に潜り込んでいたOという男だった。何かそわそわとおびえたOが出て来たあとに続いてヌーッと顔を出したのは、何とソ連兵ではないか。私は仰天した。それも五人や六人ではなく、次から次と続いてくるのである。なぜこんなことになったのか忘れてしまったが、Oが手引きして連れて来たのである。ソ連兵たちは、たんす、押し入れと手当たり次第かき回し始めた。主人たちの危難を知った忠犬ベリは、猛然と吠え始めソ連兵に立ち向かおうする。意気地のない人間と違い、主人たちを苛めるソ連兵が来るとベリは怒り狂い、そのためベリはソ連兵に銃で殴られ、蹴飛ばされたりした。私はソ連兵が来るとベリに覆いかぶさるようにして抱きかかえては庇った。この日のソ連兵は数十人と圧倒的に多く、いつもの掠奪と雰囲気

も全く違っていた。そこでベリを綱から外し、玄関から「行けっ！」と命じて外へ逃がした。

後日、引揚げが近づいていたころ、「ベリに困った。ベリに困った」というのが野田さんの口癖となった。これを聞いていたベリは出発の迫ったある日のこと、どこかへ出かけたきり、ついに帰って来なかった。これを聞き知った人たちは「主人の気持ちを察して身を隠したのだ」と言っていて、かわいそうなベリを哀れんだ。

ベリを外に出して部屋に戻る途中、私はソ連兵に腕を掴まれ、ボディチェックをされた。拳銃を私の胸に押し当て、ホルドアップさせて身体を上から下まで撫で回し、次に後ろを向かせて背中からズボンの後ろポケットまでチェックし、私に武器のないことを確かめてから放免してくれた。これには十歳の私でも十分に屈辱感を味わった。私は小さい弟を抱き、妹と次弟とで部屋の隅にかたまってソ連兵のするのを見つめていた。するとOの何が気に入らなかったのか、一人のソ連兵

が大声を上げると同時に拳銃の台尻でOの頬を一撃した。「バシッ！」とにぶい音がして、Oの頬は見る見るうちにお多福のように腫れ上がっていった。続いてほかの兵隊が及び腰になってマンドリンの銃口をOに向けた。そのときOはバツパリと倒れるように土下座して、額を畳にすりつけて、両手を合わせて拝みながら泣いた。それを見てやっとソ連兵はマンドリンの銃口をおろした。私は、子供で本当に良かったと思った。子供の私たちは、そんな目には遭わされなかったから。さすがのソ連兵も、私たち子供には何も乱暴しなかった。私たちの方を見ながらマンドリンを左右に振り回し、「カピタン、トルルル」「ドワ」などと叫んでいた。その言葉から「将校が二人狙撃された」と言っていることが分かった。それで今夜、大掛かりな搜索を受けているのだった。道理で組織的に大勢の兵隊が来て、ひっかき回しているが、掠奪しないはずだ。すると、今度は押し入れの中の奥に隠してあるものが心配になってき

た。それは、現地で除隊し南下して行く日本の兵隊さんが、山盛りの砂糖と一緒に「自決用に使いなさい」と置いていってくれた一発の榴弾であった。どうしても生きていけない事態に至ったとき、これを使えば五人の家族が一度に確実に死ぬるからである。使い方も教わり、押し入れの中にタオルでくるんで大事に隠しておいた。これが発見されたら一大事である。ハラハラしながら榴弾が発見されないことを祈り続けた。すると今度はどういうことか、Mの奥さんが地下室から床の間を通って上がって来て、「ギャー。ギャー」と悲鳴を上げながら押し入れの中をかき回して、二階の押し入れ目掛けて逃げて行った。これは、見ていたソ連兵に押し入れから二階に行けることを教えたようなものだった。

ソ連兵は、早速押し入れから二階に上がりだした。これで、どの家への逃走網もすべて分かっけししまい、その後は住宅中の家が全部徹底的な搜索を受ける羽目になった。Oといい、Mの奥さんと

いい、だらしのない人間は平和な時代はそれだけのことだが、大事に至ったときにとる彼らの意気地のない行動が、他に及ぼす迷惑は計り知れないものである。

夜が明け、武器のないことを確認し、目的を達したソ連兵は、今度は素早く目的を掠奪に切り換えた。ソ連軍進駐のときから、社宅では貴重品や着物など大事な物は茶箱などに詰めて、地下室に隠してあった。ソ連兵は宝の山を掘り当てたのである。良い物は根こそぎ持っていかれた。ほとぼりのさめたお昼ごろになって、母たちが戻って来た。母たちは地下室にソ連兵が入って来たので、這って一階の床下に伏せていた。しかし畳が剝がされ、床板の間隙から剣がブスブス刺さってきて死ぬ思いだったが、息を殺してジッと我慢していたという。この後しばらくは、これを伝え知ったソ連兵に徹底的に掠奪された。

掠奪に音を上げた社宅の人たちは、どう段取りをつけたのか、私の家をソ連軍の将校の宿舎にす

ることにした。「毒をもって毒を制す」というやつだ。やがて将校が、当番兵を連れて私の家を宿舎として入居したので、掠奪はピタリと止まった。この将校は、もの静かな良い人で、隣に住む野田さんや私たち家族と仲良くなった。呼ぶと、喜んで遊びに来て、一緒に食事をし、そのうちに上手に箸を使うようになった。将校は、私たちの小さいころのアルバムを見て「マーリンキ（小さい）、マーリンキ」と目を細くして、国に帰れば自分にも子供がいると言っていた。

この冬、スチームはもちろん使えず、各戸で手製のベチカを作ったが、石炭は残り少なかった。そこで、社宅の人たちが将校とどう交渉したのか、ある夜中のこと、この将校がトラックで社宅の中庭に良質のコークスを山積みしてくれた。お陰で私たちは凍え死にすることもなく酷寒の満州の冬を越すことができた。また、私はこの将校のあとについて宿舎になった私の家に行き、黒パンをもらい「スパシーバ」と礼を言って小脇に大

きな黒パンを抱えて帰って来たこともあった。この将校は昭和二十一年三月、ソ連軍の奉天撤退まで私の家に住んでいたが、別れにあたり、送別の食事を開き、私の端午の節句の兜や武者人形をあげると「スパシーバ、スパシーバ」と、とても喜んだ。

敗戦から、二、三カ月が過ぎたころから銃声もまばらとなり、日本人も昼間街に出られるほどに治安も回復した。母も野田さんの奥さんと一緒に父の背広や、男の人たちがついたお餅などを持って街に行き、にわか露天商になった。多くの日本人も、にわか露天商になって青葉町通りを占領した。母が帰ると、母の背中におぶわれていた下の弟は、やっと自由になれたと喜ぶ間もなく再び若い奥さんたちの背中におぶわれて、グズリながら街に出て行った。そのころになると、さすがに赤ん坊をおぶった女の人を拉致するようなソ連兵はいなくなっていた。そこで小さくても強力な用心棒として、若い奥さんや娘さんに引っぱり風と

なっていた。しかし慣れぬ露天商の方は長続きするものでもなく、その後は技術屋の集団であった社宅では、男の人たちが、どこからか仕事を見つけてきては出かけて行った。そして、稼いできたお金は私たちの家族にも平均に分けられた。反対に女性家族は、単身赴任のような形になっていた家族のいない男の人たちの食事の支度、洗濯、掃除などを受け持つことにした。小さないさかいはあったにしても、引揚げまでの一年間はこうして社宅の人たちは助け合い、団結して暮らしてきた。

各町では、ブロックごとにお寺の本堂や倉庫を借りたり、公園の木の下などで寺子屋式の学校が再開されたのもその頃のことである。私たちは、夏休み以後はついに学校に行くことができなかつた。生徒が集まったところに、教師が出かけて行くのである。私たち青葉町周辺は、覚張という教師の名をつけた学級であった。一年生から六年生までの混合学級で、あっちこっちに転々と引越

す寺子屋学級は、ろくな勉強もできなかった。しかし、昭和二十一年三月、公園で六年生は卒業していき、繰り上がって私は六年生になった。その頃になると、掠奪専門の武装強盗軍団の鬼畜ソ連軍は撤退して、街中もきれいになっていった。

進駐部隊もソ連軍から八路军に変わり、その八路军も間もなく北上してきた国民政府軍に追われた。国民政府軍が街の主人となったある日、政府軍の高官を出迎えるということで、日本人の子供たちも大勢狩り出されて沿道に並んだ。私たちの打ち振る旗の前を黒塗りの車が通り過ぎて、出迎えは終わった。この高官というのが「宗美齡」であったと教わったのは、ずっと後年のことであった。いづれにしても、敗戦国日本人の子供は、戦勝国の旗「晴天白日旗」を振らされて、掠奪とは、また違った屈辱感を味わされた。

「在外邦人引揚げの記録」の年表を見ると、奉天から最初の日本人引揚列車が出発したのは、昭和二十一年五月十五日のことである。うわさを聞

きながら、母はポツポツと引揚げの準備を始めていた。遠足に使ったリュックサックでは間に合わないで、それぞれの体力に合わせて私たち親子のリュックサックを縫い始めた。その合間に街に出て、乾パン、ドロップなどを見つけては、携帯食料として買い求めたし、ズック靴、日除けの帽子なども買い揃えていった。出発間際になると肉を油で炒めて、これをニンジン、ゴボウなどと味噌煮にして飯盒にいっぱい詰めた。幾日かかるか分からぬ引揚げの準備に備えて母は工夫を凝らし、栄養に、保存食に、そして身支度にと細心の注意を払っていた。リュックサックができると、母はいろんな物を詰め込んで私と妹に歩く練習を命じた。私たちはリュックサックを背負い、階段を二階へ一階へと上がったたり降りたりしたが、面白くないので母に隠れては随分と怠けた。野田さんも二、三人の男の人と買物に出かけた。皆が、「よせ」というのに良い服を着ていたもので、これが満人の目について、一緒に行った人たち全員が

郊外に連れて行かれ、身ぐるみはがされて本当にふんどし一本で帰って来た。反抗した野田さんは殴られて顔が倍ぐらいに腫れ上がり、全身打撲で大八車に乗せられて帰って来た。顔が変わって、私には野田さんとは思えなかった。結局この怪我が原因で、野田さん夫婦は私たちと一緒に帰国できず、大分遅くなってから帰国した。治安が回復したといっても、日本人に対する治安とはこの程度だった。私たちが引き揚げるところは、父の本籍地の静岡県三島市で、野田さんの実家は隣の沼津市大平だったので、野田さんは常々「一緒に帰ってあげる」と言ってくれていたが、結果的に一家は、力強い保護者を失ったこととなった。

私たちの引揚げの日が、昭和二十一年八月四日と決まった。所属は第一五三大隊第八中隊第一小队で、社宅の住人は皆同じ小队である。出発の前日には、着替え、携帯食料などを点検しながらリュックサックに詰め込んだ。ズック製のバケツの中には五人分の茶碗、おわん、しゃもじ、お

玉、箸、小さなお鍋などの炊事道具を入れた。そのほかに水筒、帽子などを整理して並べ、持って行けないものは、布団から何から一切合切、全部捨値で満人に売り払ってしまった。野田さん夫妻は、遅れて引き揚げる梯団に属するため、その梯団の人たちと一緒にいるために引越さねばならなかった。

出発の日がきた。私が少年期を過ごした名残尽きない高岡荘、それにお世話になった野田さん夫妻の奥さんと、慌ただしく、あっけない別れだった。私たちは迎えに来た馬車に唯一の財産となったリュックサックと一緒に乗り込んで、直線にして約六・五キロメートル離れた北奉天駅に運ばれた。そこにはコンクリートのプラットホームしかなく、東京駅を模して造られたという丸屋根に小さな窓のついた、あの奉天駅とは最後のお別れもできなかった。

馬車から降りて初めて本当の引揚げが始まった。三十四歳になった母は、リュックサックを背

負い、首から左右に水筒とカバンをかけ、胸に二歳になった三男を抱き、小さなリュックサックを背負った五歳の次男の手をひいていた。九歳の妹は、置いて行けと言われたきれいな着物をガンとして放さず、リュックサックに入れて頑張つて歩いた。十一歳の私は、母と同じようにリュックサックを背負い、首から左右に水筒とカバンをかけて立ち上がるうとしたが、どうしても立ち上がれず、周りの人にリュックサックを引っ張り上げてもらつてやっと立ち上がった。立つには立ったものの、腰が定まらず、野次郎兵衛のように、重心のかかった方にふらふらのめりながらや々と歩いた。私は、母の命令にそむいて練習を怠けたことを後悔した。母は、ともすれば梯団から遅れがちになる私たちを励まし、一生懸命歩いた。

私たちの乗った汽車は貨物列車で、フラット車というらしいのだが、ようするにボクシングのリングのように四隅に角材を立て、これにロープを回してあるだけの危険な代物だった。リュック

サックや荷物を外側に並べて、中の方に人間が座り込んだ。私のふるさと奉天ともいよいよお別れの時がきた。日本人を満載した貨物列車は動き出した。隣の駅に五、六分着き、線路際には切れ目なく家が続く日本とは違い、満州は駅を出ると人家など全くない大草原を何時間も走つて隣の駅に着くのだった。汽車はどういうわけか駅でもない所に度々止まった。真上からは太陽が容赦なくジリジリと照りつける。そんな時間を利用して、母は汽車から降りて、弟たちの用を足させていたが、その間中、私は汽車が出てしまわないかと気が気ではなかった。夜になると最前部と最後部に乗っている護衛の中国兵が、しばしば夜空に向けて銃を発射した。真つ暗な大平原を驀進している貨物列車の上で聞く銃声は、ソ連軍が進駐してきたときに聞いた銃声より、ずっとずっと心細かった。

私は貨物列車に乗った時から困いのないことが心配でたまらなかつた。落ちたら大変だと懸念し

すぎた私は寝ぼけて、自分自身が驀進する列車から落ちた。しかし奇跡的にも私は怪我一つせず助けられた。はっと気がついたとき、私は左右どちらかの手首が何かにはさまれていて、身体はゴーゴーと音のする真つ暗な宙に浮いていた。続いて強い力で引っ張り上げられたのが分かった。母が気付いたときには、私はリュックサックの山を越えて列車の外に落ちていったという。私を助けてくれたのはそばにいた外岡さんという人で、私が動き出していたのに気付いて、手をのばしたが間に合わず、私は列車の外に落ちていつてしまった。しかし、どういう訳でそこにあつたのか隅の角材と一緒にスコップが立っており、そのスコップの握りの部分の三角の柄の中に私の手首がひっかかっていたのだそうである。すかさず引っ張り上げてもらい、私は九死に一生を得た。周りの人の心配をよそに、一番呑気だったのは、助けられても半分夢見心地の私だった。「押さえてあげてから、安心して寝なさい」と言われて、

安心した私は朝まで泥のように眠った。

次の日、錦県に着いて列車から降りたとき、「走っている列車から落ちたが、助かった子供」ということで、私は一時有名になった。あとで、この時大事にしまつて持ってきていた祖母(父の母)の写真がメチャメチャになってしまつていたことが分かり、母は「あの時、お前は、おばあちゃんに助けてもらったのだ」とよく言つたものだ。収容所までは、どれくらいあつたのだろうか。再び荷物を背負つて、私たちは母に励まされながら、梯団のあとをついて行つた。鉄条網で数百メートル四方ぐらいの広さに囲まれた中に五階建てほどの大きな建物があつた。この建物は爆破されたのか、どの窓も床も粉碎されていた。この建物のコンクリートの瓦礫だらけの二階の隅、床が落ちて一階の見える片隅が私たちのねぐらとなつた。

ゴロゴロの瓦礫を少しでも平らにならし、ごみを敷いた上に、毛布にくるまって親子五人固まっ

て寝た。雨が降ると窓枠のない大穴から雨が容赦なく降りかかった。鉄条網の外側から中に向かつて、日本人から最後まで稼ごうと商魂たくましい満人が店を開いていた。饅頭を売っている店、大きな鍋に豚の頭一つをダシに放り込んで何やらグツグツ煮て売っている店など、收容所の外側は賑やかな露天商街のようであった。お金さえあれば何でも買えた。私たちは引揚げまで家を追われなかったもので、一人千円までしか交換されないことは分かっていたが、相当まとまったお金を持っていた。母は晒^{さらし}でポケットのついた腹巻きを作り、一家全員がこのポケットに沢山お金を入れた腹巻きをつけていた。これは万一母が倒れたとき、お金を持っている子供なら、誰かが日本内地に連れていってくれるだろうという母のほかない願いであった。その頃は御飯でも何でも売っていたから、食べる苦労はなかったに違いない。ただ母は「このお米は日本に着いた時か、死力を尽くさなければならぬ時に炊いて食べるのだ」と言っ

て、袋に入れて持って来ていたお米には絶対手をつけなかった。この收容所で二、三週間ぐらい暮らした後、乗船港の胡盧島^{コロロ}に向かって出発の日がきた。

梯団は、線路際に小隊ごとに横隊になり人間とリュックサックが整然と並んだ。最初は中国兵が全員の荷物を調べたらしいが、その頃は抽出検査だった。この小隊は検査、この小隊はよしと近づいてきて、私たちの小隊の前は素通りして行った。私は嬉しくなつて、母に「良かったね」と声をかけた。母は私に「黙っていなさい」と言つて怖い顔をしてにらんだ。私の声を聞きつけた中国兵が戻つて来て、私たちの小隊を検査することになると同じ小隊の人に迷惑がかかるということと、既に検査の決まった人たちに気を兼ねたからである。今度の列車は屋根はなくとも厩^{うま}いがあるからデラックスであった。この中に家畜のように詰め込まれ、太陽にジリジリ照らされながら、どのくらい乗つたのだろう、最後に線路が曲がり

くねって、山海関の少し北東にあたる胡蘆島に着いた。

埠頭には日本の信洋丸（約七千トン）という貨物船が迎えにきてくれていた。この船の三層に分かれた一番下の船倉が私たちのねぐらとなった。各小隊の境はリュックサックや荷物で区画した。

船は静かに岸壁を離れた。私はこれで助かったという思いと同時に、恐ろしくも懐かしいふるさと満州と決別すべく、陸地が見えなくなるまで後部甲板に立ち尽くしていた。船は九州を目指した。

出航後、四、五日した夜「日本の灯りが見える！」という声に、大人も子供も甲板に駆け上がった。そして水平線とおぼしき彼方に、やさしく招くように、チラチラと瞬く「祖国日本」の灯りをじっと見つめて声もなかった。

翌日、佐世保港に入港した私たちの船は、検便の結果、疑似コレラ患者が発見され、船ごと湾外に出されて隔離された。日本内地の緑の山々を目の前に見ながら一カ月ぐらいの間上陸を許されな

かった。この間にも大勢の人が亡くなった。遺体の引き取りにポンポン船がくる。菰こもに包まれた遺体は、一人淋しくひっそりと下船していく。やっと生き延びて、祖国を目の前にしながら果てた、その悔しさはいかばかりであったろう。その無念さは察するに余りある。この船を子供たちは死骸船と呼んでこの船に乗せられることのないように祈った。また、この間に開かれた学校で私はアルファベット二六文字を覚えた。

やっと上陸の日がきた。今、たった一枚残っている三男名義の「佐世保引揚援護局発行の定着証明書」を見ると、上陸の日は九月二十二日である。一晩か二晩、援護局の宿泊所に泊まったあと引揚梯団は解散し、それぞれの行く先に別れた。

私たち一家は、品川行き満員の引揚列車に乗り込んで出発した。今度は客車だから、落ちる心配がないので印象がうすく、広島広島の街が何もなく真っ平らで、線路際の将棋倒しの墓石を見た記憶ぐらいしか残っていない。

確か車中で二泊し、雪のない富士山が左手に見えてきて、旅も終わりに近づいていた。この汽車は三島駅には止まらないので沼津駅で降りて、今は無くなってしまったチンチン電車に乗り換え、三島の広小路駅に着いたのは、昭和二十一年九月二十六日の午後のことである。引揚げ後、初めて日本内地の街に一步踏み出して、広小路の踏切から三島大社方面を見た時、私は不思議でならなかった。男の人が呑気に自転車に乗って行く。若い女の人がスカートをはいて歩いて来る。自転車は奪われないのだろうか、女の人「マダムダワイ」とさらわれないのだろうか？ 突然の平和に、私は戸惑うばかりであった。

見た目の世間の平和とは裏腹に、根なし草となった私たち一家を待っていたのは、引揚者という名の難民生活であった。伯母（父の姉）を頼った私たち一家に手をさしのべるほど、伯母の家に余裕はなかった。やっと親類の四畳半をあけてもらって、私たち一家はそこへ住みついた。

母の苦闘が始まった。母が結婚して、父と一緒に何不自由なく暮らした、安定した生活は、ただか十二、三年の間に過ぎなかった。それ以後の母の半生は、父親役との二役で、四人の子供を育て上げることのみ費やされた。まず敗戦後の動乱の満州で子供と生き抜いた一年間、五十有余日かかって日本に帰って来た、あの引揚げの旅、引揚げ後もついに母は苦勞から解放されることはなかった。伯母からは、子供を手放して、どこかにやれと叱られていた。近所の人たちも「よそ者」には冷淡だった。日本中が食べていくのに精いっぱいこの時代だったから無理もないが。

私と妹を学校に出すと、母は二人の弟を放り出したまま働きに出かけた。重たい荷物を背負ってどこかに行商にも行った。三島大社の境内に露店を出して、みそおでんも売った。炎天下の線路の草取りにも雇われて行った。それまで家事仕事しかしたことのない、元々丈夫ではなかったあの母が、あの細い身体で。母は毎日手負い獅子のよう

にすり切れながら、死に物狂いで働いた。帰って来ると死んだように倒れていて、しばらく動けなかった。このままでは、母は間もなく死んでしまう、私は心配だった。何やら私たちに水っぽい物を食べさせると、あとに食べ物は何も残っていなかった。栄養不良から小さな傷でも化膿した。朝になると顔を洗って、目やにを落とさない目があかなかつた。

ソ連軍に脅かされて暮らした生活も、瓦礫の上で暮らしたあの引揚げの生活も、周りの人たちは皆同じ境遇だった。そして「生きて日本内地に帰ろう」という共通の目的があっただけ、その頃の生活の方が幸せであった。あの頃、母の手にあの一発の手榴弾があったなら、母は躊躇なく一家心中を計ったのではないかと考える。皆が、一度に確実に死ねるから。そんな母をからくも支えていたのは何か？ それは、父が帰還した時、父に一人も死なせなかつた四人の子供を見せた。そのあとならいつ死んでもいい。ただ、その一念で

あつたに違いない。

あの頃の、惨めで思い出したくない真つ暗闇の生活の中に、やっと幽かに光が差し込んできたのは、ふとしたいきさつから、母が三島の野戦重砲兵第二連隊の跡に兵舎を校舎にして開学した日本大学の用務員に採用され、細々ながら固定したお金がもらえるようになり、四人の子供と一緒に学内の旧軍隊倉庫の片隅に住むことを許された頃のことである。母は大学で骨身惜しまず働いた。私たちきょうだいも順次中学を卒業すると働きに出た。母のこの日本大学への就職が、それまでのどん底の生活から私たちが這い上がる「再生への原点」となった。私は中学を卒業すると小さな印刷屋の工員となり、翌年から夜は定時制高校に通い、卒業すると引き続き短大二部に通って卒業した。

父はついに帰らなかつた。母も薄々諦めていたのだろうが、戸籍の上からも父の帰還を諦めたのは、昭和三十三年秋、狩野川台風により、大勢の

悲惨な行方不明者が出たことを知ったときのことである。母は、父も同じように戦死してソ満国境の土の中に埋もれているとしたら、今まで拒否してきた戦死公報を受け入れて、父の慰霊をしてあげねば申し訳ないと考えたのである。

翌三十四年七月、母と私は県庁に出かけた。そこで県下から大勢集まって来た同じような境遇の遺族と一緒に、私たちも父の名前の書かれた紙切れが一枚入っただけの白木の箱をもらって帰って来た。父は、戸籍に昭和二十二年七月七日ソ連ハバロフスク州ホール地区で戦病死と記載されて除籍された。

形ばかりの父の葬儀が済むと、父が計らわれてたかのように、官庁から採用通知がきて、私は国家公務員になった。採用されたばかりのところ上司から「君のお母さんは評判がいいなあ」と言われたことは、今でも忘れられない。私は役所の中に自分の居場所が定まったころ、通信教育部に編入学し、三十歳の時大学を卒業した。

母は六十五歳の定年まで日本大学で働いた。母は愚痴一つこぼさず、常々「時が必ず解決してくれる」と言い、「子供が勝手に育ってくれた」とも言っていたが、女の細腕で過ごしてきた母の半生の苦労は並大抵のものではなかった。

私は五十歳の時、たたき上げの事務官に受験資格のある昇任試験に合格し、ノンキャリアの副検事に任官して新任地の大阪に単身赴任した。母は私には何も言わなかったが、家内には「仏さん（父）も喜んでいると思う」と言っていたようにであった。母には辞令と「秋霜烈日」のバッジを見せ、私の新しい仕事が理解しやさいように「帰って来たら法廷に立つところを見せてやるから」と言って出たのだが、その年の暮れに心筋梗塞で母が急逝した。葬儀の際、検事総長をはじめ、中央、地方の高官の方々から多数の弔電をいただき、寺の坊主が「お前、随分偉い人から弔電がくるな！」とびっくりしていた。また、母が親しくしていた元日大職員の方から「お母さんが自慢し

ていましたよ」と聞いた時は、「あの控え目な母がああ程度のことを喜びとして何と言ったのだろうか。敗戦後、労のみ多く幸せ薄かった母の亡くなる直前に、小さな喜びを与えることができ、少しは親孝行をしたことになったのだろうか」と絶句した。

その後、沼津、三島、下田と配置換えになり下田に単身赴任中に心臓発作を起こすようになり、循環器病院に緊急入院し、「経皮的冠動脈血管形成術」を受けたのを潮時と考え、上司に辞職を申し出て、平成六（一九九四）年に定年まで三年余を残して依願退官した。五十九歳だった。

退官後は、全く分からなかった父の学歴、部隊略歴、戦闘歴、抑留地などを精力的に調査した結果、たいしたことは分からなかったが、本文中に記した程度のこと判明した。

そこで、食事制限を守り、ウォーキングで心臓を鍛え、身体に自信のついた平成八年から、ふるさと満州を二度、引揚げ上陸港の佐世保を一度訪

ね、往時を検証して歩いた。

次に、墓参団を見つけては参加させてもらい、出発の日には必ずお寺に行き、お墓の母に「一緒に行こうね!」と声をかけて母と二人でこれまでに三度、ハバロフスク州ホール地区を訪れ、そこに眠る父と大勢の方々の英霊に「心安らかに眠りください」とお参りをしてきた。

最後に、世界平和を祈り、先の大戦で亡くなった方々及び遺族で既に物故された方々に合掌して
攔筆する。

父と満州の思い出

滋賀県 上谷 岩三

プロフィール

私は昭和五（一九三〇）年の正月元旦に、中華民国哈爾濱道裡拾四道街拾四号（当時の住所表示）という所にあつた自宅で生まれ、そしてハル